

黒鳥の旅もしくは幻想庭園

中井英夫



潮出版社

黒鳥の旅もしくは幻想庭園

昭和 49 年 5 月 20 日 印 刷
昭和 49 年 5 月 25 日 発 行

著 者 中 井 英 夫

発行者 島 津 矩 久

東京 都 新宿 区 南 元 町 14-1
発行所 株式会社 潮 出 版 社
電話 (357) 7111(代) 振替東京61090

〒 160

印刷 中央精版印刷

製本 牧製本

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

© H. Nakai 1974 Printed in Japan

黒鳥の旅もしくは幻想庭園・目次

I オーストラリア幻想旅行

黒鳥の旅 7

幻想庭園 19

出口と入口について——言語空間の祭典 33

II 白鳥盗人・ほか

ミロのビーナスの教えていったもの——女性の同性愛について
鏡と迷宮——男のナルシズムについて 73 65

白鳥盗人 86

日本人の貌——非国民の思想 93

余白の人——私の憲法論 111

暗い宴——わが体験 115

III 百科事典について

百科事典とコンピュートピア 123

街角での眩き 128

百科事典と人間と 135

IV

色彩・その毒について

色彩・その毒について 141

アリス狩り 152

吊された裸童女——建石修志の世界 160

イカロスのほほえみ 164

国民服の菊五郎 165

炎と記憶 168

悪夢の再来——笠井勲「七つの封印」 172

ぜいたくということ 176

文字・色・音——出会い 178

幌の中——私と医者 181

ベッドの中の同行者——独りぐらし 183

街の中にタイムトンネルを見つけた 187

緑への転身——女が美しく見えるとき 193

牡蠣の殻なる牡蠣の身の…… 196

石黒健治の「広島」 202

廃墟の唄——流行歌について 203

名前と翼——漫画について 205

古い時計——映画の時間・観客の時間 207

誰が鞭を持ち始めたのか——ナチは復活するか

212

金魚と蟻と人間と——人肉喰いの思想 217

同時代の吸血鬼 222

『テオレマ』について 227

シャンソン二題 229

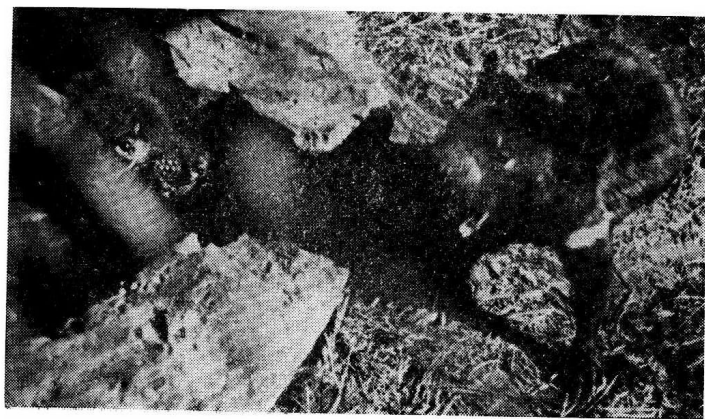
I われらのベルエボック

II 嘘つきアルフォンソ

あとがき 233

I

オーストラリア幻想旅行



タスマニアデビル (著者撮影)

黒鳥の旅

黒鳥。ガンカモ科。ラテン名はケノーピス・アトラータ *Chaenopsis atrata* “黒変した驚鳥の類”という。もともとはタスマニア島の中部の湖あたりで、ひっそりと暮していたものだろうが、体は大きいし、翼の力も強いので苦もなくバス海峡を越えてオーストラリア本土に散らばり、やがて南太平洋を渡ってニュージーランドにも移り住み、いまでは北島のエルズメア湖だけでも、六万羽から八万羽が棲息しているという。世界のどこに移されても耐えられるのか、いくぶん侘しそうにしながらも、日本では皇居のお濠に浮かんだりしている。

私が初めて黒鳥を見たのは、戦争が終ってまもないとしの秋で、上野の動物園——いまのような水上動物園はまだ出来ていない、正門を入ってとっつきの暗い檻の中に、それは一羽だけでいた。二百年前、キャプテン・クックがイギリスへ帰って、オーストラリアには黒鳥というものがあると話したとき、聞く者は誰も笑って信じなかったというが、私にとってもそれは同じで、きんいろの陽ざしに包まれた漆黒の鳥は、眼の前に見ながら、なお異次元界からの使者としか思えなかった。あおみどろの池に首を垂れ、時おり小さな声で啼き、それから或る日突然に羽ばたい

てみせると、漆黒の翼の下に隠された眼に沁みるほど純白な風切り翅におどろかされた。黒鳥はただ黒く塗られているにすぎない、と私は思った。

醜く戦後に生き残った、その思いにばかり苛^{さい}まれていた当時の私にとって、檻の中にうなだれている黒鳥は、さながらもう一人の私にほかならなかった。それは、真黒い恥の固まりで、きれいな小さい啼き声は、こみあげる恥の記憶に堪えかねて洩らす呻きというより呪文に近い。どのような魔法の鞭が、こんな変身を可能にしたのだろう。いや、あれを見たそのときから、黒鳥と私とは、こともなく入れ変ったのかも知れない。少なくとも一羽の黒鳥は翳のように私の中に棲みついた。タスマニアの地図を取り出してみると、南端の主都ホバートからダーウエント川をさかのぼれば、中部の湖に達するらしい。そこに帰れさえすればと、“檻の外で”私は眩いた。しかし、そのときの私にできたのは、あおみどろの池に浮かんでいた、小さな羽の一片を拾いとり、丁度そのとりに始まったコミュニティ・チェスト——赤い羽根運動の群れの中を、代りに黒鳥の羽を胸につけて歩くぐらいのことだった。

それから二十数年が経った。このとき檻の内と外とで交した対話を『黒鳥譚』と名づけて、八十枚ほどの短篇に纏めたのは、ようやく昨年のことである。小説の中には、世界一醜惡な獣といわれているタスマニア・デビルも顔を出す、戦後の変質した時間の中で、私の翼の片方も、これに似た残忍で狡猾な獣のためにいつかぼろぼろに喰いちぎられていた。もう飛べないのかも

知れない、と私は思った。故郷へ帰る力は、もう残されていないのかも知れない。そのうえ、あそこへ戻れば、僅かに残ったもう一枚の翼も、待ちかまえたかれらの鉤爪と牙とで、さんざんに噛み砕かれるだろう。だが、むしろそのために帰るのだ、と私は自分にいきかせた。外界のタスマニア・デビルは、やはり悪魔であり主人でもあるだろう。行ってこよう、と心に決めると支度もいらぬ。旅行鞆ひとつを肩にした日本人観光客の見せかけで、この五月、咲がけの薔薇に心を残し、あわただしくタスマニアへ向けて旅立った、これは一羽の黒鳥の旅行記である。

*

タスマニアはもう深い秋で、公園や植物園には到るところ薔薇が咲いていたが、それは花片の薄い秋の薔薇なのであった。

ホバートへ着いた翌朝、地図一枚を片手にホテルを飛び出し、少し離れたシティ行きのバスに乗った。とりあえず動物園へ行こうと考えたのである。タスマニア島といっても北海道と同じくらいの大きさだから、中部の湖に行くのも容易ではない。それに冬も近いシーズンオフとなると観光バスも合乗りタクシーもないらしく、そのところが不安でメルボルンの広報局へ寄つてみたのだが、ま、自前でおやりになるんですな、人手不足のいまどき通訳を買つて出る物好きもないでしょうからという御親切な挨拶なので、それならという気になった。

むろん広報局の当人がこないいい方をしたわけではなく、私の方でも黒鳥を故郷に帰してやるためにはるばる来たんですなどと馬鹿なことをいったわけではない、百科事典相談役という勿体ぶった名刺をこしらえ、大いに両国の文化交流に役立ちたい旨を披瀝したのだが、間に立った日本人のお年寄からきかされたのはそういう返事だった。むろんそうでなくとも、向うはそれ専門の練達の士だからたちまちこちらのうさんくささを見ぬいたのであろう。しかしそのお蔭で、この動物園行きは、多少神秘的な様相を呈することになった。まずバスの中で、隣りに坐った小母さんにエクスキューズミーと切り出し、動物園はどこでしょうかと地図を見せて尋ねたのだが、知らないねという返事なので、こちらの発音が悪いせいかと、ZOOと大きく書いてみせても首をふっている。確かにホバートの地図には、博物館や植物園の記載はあっても動物園は見当らない。必ずあるものだとは決めてかかって飛び出してきたものの、それが気になり出して訊いてみたのだが、周りの他の乗客も知らん顔なので、すこし無気味になって私も黙った。無気味というより、これはいいと思ったのである。どこか遠い、見知らぬ町に辿りついて動物園を訊いて廻ると、誰も一様に知らないと答える。中には何ということを訊くんだと、非難がましい眼で見返す人さえいる。何か秘密があつて、動物園の存在を隠したがっているらしい……。そんな出だしの小説を考えたからだった。

こういうことは子供に訊くに限る。そう思つてシテイに着いてから、手頃なのを掴まえて当っ

てみると、すぐ教えてくれた。動物園はホバートではなく、ダーウェント川沿いに10マイルほどさかのぼった、グラントンという町にあるのだった。60マイルも先の中部の湖には及ばないが、少しでも近づけるのは嬉しいことだ。といって、もう少し予備知識が欲しい。メルボルンでこりて、ツーリストビュローまがいのところには、いっさい立寄るまいと思っていたのだが、やむを得ず受付へ行つて、グラントン行きのバスの発着所を確かめ、念のため向うへ着いてから動物園までどれくらいかと尋ねると、歩いて10分くらいだと教えてくれた。ハイヤーは6ドルくらいというので35セントのバスにしたのだが、これは儉約のつもりではなく、シドニー以来、バスやトレインが楽しくつて仕方がないと思い始めたからである。

退け刻の混んだバスでも、喫煙席では悠々と煙草を吹かしているのも嬉しいし、トレインはまた日本ではどんな山奥の登山電車でもこれよりましだろうと思われるほどで、ドアは相当な力をこめて引張らないとあかないというのも愉快である。この古さには、市民ひとりひとりの手垢が染みついているので、使いなれた家具調度のように、容易に新品と換える気にはならないらしい。シドニーの百貨店デビジョン (David & Jones) のエスカレーターはがらがらと音を立てる旧式なものだし、一流銀行でさえ手で巻く銀いろの計算器を用い、こちらの暗算のほうがよっぽど正確で早いくらいである。タクシーのオートドアもないし、ワンマンバスでもピンパン次降りますなどという気の利いた仕掛はないけれども、その束の間の便利さで、われわれ日本人が何を購^{あな}

っているかといえ、時間のゆとりなどではさらさらなく、前にもました気ぜわしなただけなことにまちがいはない。従つて多少でも時間旅行を試みたい方、戦前の東京ののんびりした光景を懐しがる向きにはシドニーのセキュラケ（Circular Quay）のあたりをおすすめる。日暮れ刻、反戦紙のミラアや、ソノオとしか聞えない The Sun 紙の夕刊売子たちが、哀しい声をふりしほったあぐく唇を結んでいるといった立姿に添えて、No. 6 の栈橋からは、隅田川のボンボン蒸汽そっくりな船が出てゆき、灯りの点った船室には、勤め帰りの旦那方がゆったりと夕刊をひろげている姿が見られるのだから。

話はますます傍道にそれて恐縮だが、メルボルンの市電もまた緑と黄に塗りわけられた昔ながらのチンチン電車で、時間旅行の点景には欠かせない。車掌室と運転台を結んで、手垢に汚れた紐が通っているところも戦前の東京の市電そっくりで、悪戯に引くと10ドルの罰金だが、降りたところで客が立つてチンと引張れば電車は停ってくれる。ただ呆氣にとられたのは、どの停留所にも駅名の標示がないことだった。車掌もまた真中に突立っているだけで、シティ入口のフリンダーズ駅ぐらいしか、次は何などといわない。せめて安全地帯でも設けてあるところはいない。何も出ていない道端が停留所という場合も多いので、初めての外人客などに見当のつけようもないのである。つまりこの市民たちは、自分たちの頭の中に全部停留所名を藏いこんでいるので、ついぞ不便を感じたこともないのである。しかし、皮肉でなく“市”とは本来そういうもので

いいのだ。ソビエト軍の侵入にチェコの市民たちが、町名の表示をすべて外してしまったというのもそれで、見知らぬよそ者には帰り道の表示さえあれば済む。そしてメルボルの美しい市街は、当然古くからの市民たちのためにあるので、一介の観光客などが多少困惑したところで、どうということもない。

シドニーでもメルボルンでも、在留邦人から、オーストラリアの人は思いやりがありませんという意見をきいたが、私にはそうとは思えなかった。それは善意の無関心なのだ。日本人のように、どちらからお越しで、それはそれは遠いところをまあようこそといった親切さもない代り、あざとく観光客のふところをはたってお世辞もいわない。たぶんこの国では、途方に暮れた顔で街角に立っていたら何日でも立っていられるだろう。それを思い知らされたのは、ホバートのツーリストビューローで教わったとおりバスに乗りこみ、運転手にグラントンへ着いたら教えてくれと頼んで、少しのんびりとしたあどだった。ホイココがグラントンだよというので降りてみると、白々としたハイウェイの続くまんなかで、道端にポツンとパブとトイレがあるだけの淋しい田舎だった。どうも様子がおかしいけれども、まあまあ道を訊き訊きすれば辿りつけるだろうと考え、パブに入ってバーテンに尋ねてみると、グラントンはグラントンでもここは町の外れで、親切に地図を書いてくれた道のりを見て驚いた。事実私は、それからたっぶり一時間あまりを歩かされたのである。正規のバス停を降りたにしても、十分どころか、山道を三十分は登らなくてはなら

ない。

なぜツリストビューローでは、グラントンといっても、向うの外れだから気をつけると、一言いってこないのだろう。バスの運ちゃんにしろ、動物園へ行く気ならまだ先だよと教えてくれないのだろうと、ハイウェイをとぼとぼ歩きながら、いくぶん恨みがましい気持になったが、いや、これこそ善意の無関心という、この国ならではの美徳なのだと思い返した。こちらがもう一言ずつ悪念わるを押しておきさえすればよかったのだ。それに、山道にかかってから、行けども行けどもそれらしいものの見えない不安感ふあんかんは、それなりに楽しいもので、さっき曲り角に WILD LIFE NOW OPEN と出ていた看板もよかった。どうせタスマニア・デビルに喰べられに戻ってきたのじゃないか。ただ、あの道端のバブのバーテンには、もう会うこともないだろうけれど、どうかして会いたいものだと考え、もし戦争になれば会えるかも知れないと思ってぎょっとした。なるほど戦争というのは、世界中に散らばった友人たちが、もう一度再会しようとしてひしめき合っているだけなのかも知れない。そうでなくて一体なんのためにするというのは。

舗装される前の杳掛——千ヶ滝への山道をつくりなところを、もうどれくらい歩いたのだろう。空は青く澄んで哀しいほどの秋晴れだが、こちらもそろそろ心細くなり、もうどこへ出たって驚くものか、地球の裏側へでも抜けやがれと、人の気配のまったくない道を幾曲りしていると、ようやくもう一度立札があつて、Woodville Private Zoo と読めた。なるほど、私設というのなら、